詩編 88 編の黙想（2023 年 0 3 月 15 日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

嘆きの歌：主なる神の伴いがなければ親しい友は暗闇だけ

これは主なる神から距離を感じている信仰者の嘆きの歌である。神への信頼の言葉も、感謝の喜びもなく、ただ「叫び」と「願い」だけで綴られている。主イエスの苦難を覚えるレントの時に読むにふさわしい詩であろう。「あなたの憤り」（8 節、17 節）そして「み怒り」（16 節）、「暗闇」（7 節、13 節、19 節）など否定的な用語が連続して登場する。頭書に「賛歌」とあるがこの詩は闇の経験で終わっている。もし光を見出すとすれば、「墓の中であなたの慈しみが滅びの国であなたのまことが語られるでしょうか」をひっくり返して、そこ以外では、「あなたの慈しみとあなたのまことが語られている」とも言えるかも知れない」。主イエスはこの闇と孤独と絶望を味わい尽くされた。そして、そこにも、いやそこにこそ主なる神が共にいますのである。

１．　長い頭書：マハラト、レアノト　ヘマンの歌

いやに長い頭書である。「歌、賛歌、コラの子の詩。指揮者によって、マハラト（Mahalath）に合わせて。レアノト（Leannoth）。マスキール(瞑想)。エズラ人ヘマンの詩。」この頭書は 2 つあるいは 3 つの頭書が結びつけられた感じがする。マハラトは詩編 53 編に登場した。語源は「疫病」？レアノトは「苦しい」という用語と同根であるから、この歌は「哀歌」として「悲哀」の音調で歌うのであろうか。エズラ人ヘマンは歴代誌上 2:6 によればユダ族の子孫である。そこには、詩編 89 編の頭書に登場するエズラ人エタンと共に記録されている。列王記上 5:11 によれば彼らはソロモンに匹敵する「知者」であった。栄華とその虚しさの両方を知る知者ということであればヨブ記に似ているこの詩編 88 編に通じているかも知れない。

しかし、他方、歴代上 6 章のレビ族の表によれば、ヘマンとアサフとエタンが詠唱者として神殿礼拝を指導したという。それゆえ、ユダ族のヘマンとエタン、そしてレビ族のヘマンとエタンが詩編 88 編の頭書では、ごちゃ混ぜになっている。簡単に同一視できないとしたら、この暗い、絶望的な詩の内容からすると、ヨブに通じる知者を想定した方が似合うかも知れない。

２．　主よ、わたしを救ってくださる神よ（2 節 - 3 節）

19 節の絶望的内容で終わる詩は、「主よ、わたしを救ってくださる神よ」で始まっている。 昼は私は叫び、夜はあなたの前にいます。たとえ暗闇の中でも信仰者は主なる神に向かって昼夜叫び、祈る。祈りの声が出なくとも神の前にいる。祈りが聴かれるように懇

願している。

３．　絶望的状態の描写（4－8 節）

「私の魂」は単なる内面ではなく、全人的なもので、困難に満ちていると言い、私の命は陰府（シュエオール）にまで引き寄せられていると嘆く。また、わたしは穴あるいは坑に下って行く者に数えられ、全く力の無い男のようである。6 節の「汚れた者とみなされ死人のうちに放たれ、墓に横たわる者」はハンセン氏病（重い皮膚病）を病んでいたのかも知れない。感染を恐れられ、あるいは祭儀的に穢れたものとされ、墓場に放置されて、さ迷っているようであると形容している。そこでは全く孤立し、神はみ心に留めて下さらず、神のみ手から切り離されているように感じている。地下の鉱山なのか最下層の坑に置かれている。そこは全く日の光が届かず、暗闇である。何より神から見離されたように思い、「あなたの怒り・憤り」が重たく、「あなたのあらゆる大波」（原始の海？）が詩人を苦しめると叫んでいる。

４．　孤独・孤立の中で主に向かって叫ぶ（9－19 節）

詩人は親しい友人からも遠ざけられて「忌むべき者」とされ、病気ゆえの隔離か、あるいは憎悪の的にされているというような強い意味であり、自らの内に「閉じこもる」ことしかないと言う。苦悩で目も衰えていると言い（これもハンセン氏病の症状？）、それでも来る日も来る日も「主」を呼び、主に向かって両手を上げて祈っている。主の「慈しみとまこと」（ヘセドとアーマン）というキーワードが登場するが、これらは墓や滅びの国、死霊（レパイーム は珍しい用語で巨人の子孫であるとされる。創世記 14:5、申命記 2:11 参照）の支配する場、「闇」と「忘却の地」では意味を持たず、神に感謝することも「不思議なこと」も、「恵み」も伝えられないと嘆く。

また、14 節以下では、詩人は若い時から苦しみの経験を重ね、現在は死に直面していると言う。死がそこに迫っている。そして、それらの経験をここでも、主による魂の突き放し、み顔を隠すこと、神怒り（16 節）と神の激しい「憤り」と「恐怖」が自分を圧倒し、大水の渦巻きに巻き込まれることとして経験し、愛する者も友ない孤立の中で（病気で隔離され？）、自分の知り合いは暗闇だけであると（あるいは暗闇へと）嘆いている。ダビデの歌は一般的に救い、神の助けへの感謝と喜びで終わるが、この詩にはそれがない。性急で安易な慰めを求めてはならないのだろう。イエスの十字架の死はそのことを私たちに教えているのであろうか。その中でも神に向かって人は祈るのである。イエスの十字架の絶望は神がその叫びに沈黙において連帯しておられた故に、同時に希望のしるしである。